

IV-222

高齢者を対象とした料金表の見易さの検討

中央大学院 学生員 熊木千春
中央大学理工学部 正員 谷下雅義
中央大学理工学部 正員 鹿島茂

1. はじめに

駅の料金表の基準は各鉄道会社、各支部によって違い、決定していないために必ずしも利用者に見易いものとなっていない。また、料金表の設置状況は施設に対する空間的制約もあり必ずしも最適の状況とは思われない。そこで、本研究では誰にでも見易く利用しやすい料金表とはどんなものかを考察する。さらにその結果から現在の各駅において改善の余地があるかも議論する。

2. 検討方法

(1) 見易さの構成要因

見易さを構成している要因は以下の5つと考える。

i) 料金表の明るさ

明るさは光量計で輝度・照度を測定した。この内、照度(1x)で明るさを比較

ii) 路線の色分け

iii) 料金表の設置位置

高さ(m)は地上からメジャーで計測

iv) 料金表の大きさ

看板の大きさ(cm**2)はメジャーで高さ
と幅を計測し、それより面積を算出

v) 文字の大きさ

文字の大きさ(cm)の直径を定規で計測

vi) 料金表を見る距離

床のタイル(1枚40cm)で見る距離を計測

(2) 見にくさへの対応

人は見にくいと感じた場合にどのような行動によって対応するのかを検証するため以下の2つを考える。

i) 見る距離

ii) 見る位置

キーワード：料金表、見易さ

連絡先：中央大学 計画系研究室

〒112-8851 東京都文京区春日 1-13-27

TEL 03-3817-1817

3. 検証方法

(1) アンケート調査

①調査方法・調査対象・調査期間

調査は、池袋駅でのアンケート調査とした。調査対象は、JRと地下鉄の各2箇所を選び、各場所で45歳以上の男女50人をランダムに抽出した。その結果サンプル数は、男67人、女34人となった。調査期間は、平成10年11~12月である。

②調査内容

調査では、料金表の見易さの構成要因として前述の5項目を取り上げ、それについて見にくいと感じたことがあるかどうか尋ねた。さらに見にくいと感じる料金表を指摘してもらい、その箇所の構造を計測する。一方、見易いと感じている料金表についても尋ね、感じている場合にはその箇所を指摘してもらい、現地でその構造を計測する。

さらに、見易さを構成する上記5項目に対して、高齢者の属性がどのように影響を受けているかを考察する。高齢者の属性についての調査項目は以下の6項目である。

i) 聞き取り調査の場所

ii) 利用頻度(料金表)

iii) 年齢、性別

iv) 料金表を意識しているか

v) 視力、眼鏡、コンタクトをしているか

vi) 身長

(2) 見る時間・位置の調査

利用客が料金表を見始めるのに顔をあげる時から顔をさげるまでの時間(平均時間: τ)を見る時間とする。この τ (平均時間)の変化を各鉄道会社ごとに調査した。また、利用客のしている位置から料金表までの距離も測定した。それを見易さの指標とする。

場所：池袋駅 (JR線、地下鉄、西武線、
東武線)

平日：月～金曜日

調査時間：13:00～16:00

対象者：高齢者（45歳以上を対象とする）

4. 調査結果

（1）見易さの計測結果

各場所の見易さを構成する5つの要因の計測結果を表1に示す。これによると明るさ、大きさ、文字の大きさについてはJR中央口が1番大きくなっている。高さはJR南口が高いという結果になった。

表1. 実測値

	JR中央口	丸の内東武	JR南口	丸の内中央
明るさ(lx)	450	248	140	20
高さ(m)	1.55	2	2.1	1.85
大きさ(cm**2)	2.31	0.65	2.15	0.73
大きさ(H*W)	420*55	145*45	430*50	145*50
文字(cm)	16.23	15	13.21	16

（2）利用者の意識と見易さの関係

各場所について見にくいと感じた高齢者の割合を色についての要因を除いた各要因の物理的な見易さの関係を図1～図4に示す

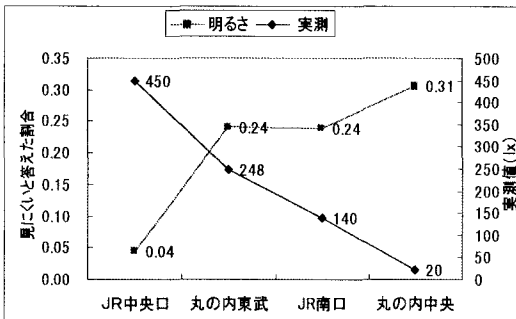


図1. 明るさと実測値の比較

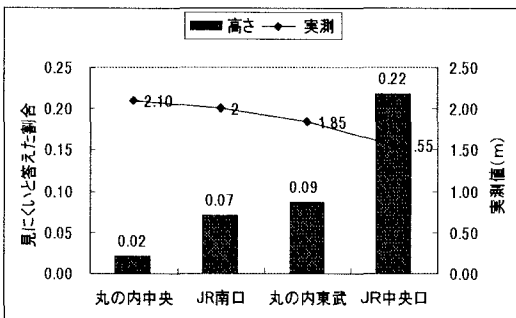


図2. 高さの実測値の比較

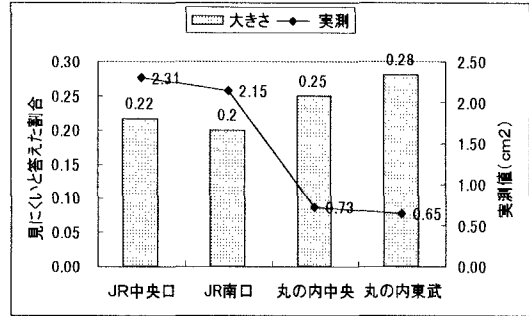


図3. 大きさと実測値の比較

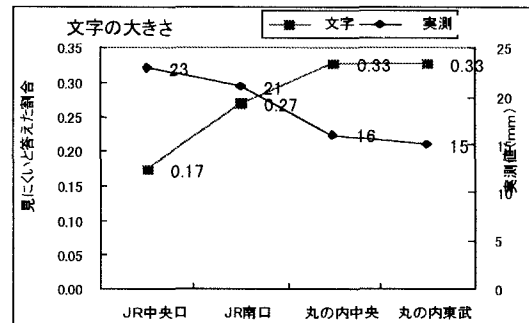


図4. 文字の大きさと実測値

明るさについては暗いほど、高さについては低いほど、大きさについては小さいほど不満が高いという結果になった。

文字の大きさに2種類ある所は大きい方を実測値として使用すると比例関係が見られる。これより文字が小さいほど不満が高いという結果になった

5. 結論と今後の課題

利用者の意識と見易さを構成する要因の物理的計測値の間には比例関係にあることがわかる。今後、利用者が見にくさをどのように克服しているのかを分析していくことを考える。このため、見る距離と時間についての計測結果と利用者の意識がどのくらい関連するか検討する。

参考文献

- 1) 老眼の本：市川宏（株）文藝春秋
- 2) 高齢者からみた歩きやすい歩道：加藤文教
土木計画研究・講演集 No17